

## む 村のしきたりも一旦リスペクトする

まちづくりの仕事でそれまで行ったことのない町や村から相談を受けることがある。それはそれでちよつと楽しい。小さな島国の日本でも結構幅広く様々な風景や暮らしに出会うことができる。

私が生まれた頃だから、ずいぶん昔のことになるが、民俗学者の宮本常一が対馬の調査をしたときの話だ。村の重要なことを決めるのに区長や総代といったリーダーだけでなく、村の人たちが集まり話す「寄り合い」が行われる。その話し合いは数時間ではなく二日とか三日とか、場合によっては夜通し話し合うのだという。それだけの時間をかけて皆の納得のいく結論をさぐるのだそう。話し合いの概略は、まず区長が話し合いのテーマについて説明し、あとは小さな組単位に別れて話し合いその結果を区長に報告する。合意にいたなければまた別れて話し合う。それを延々と納得が得られるまで繰り返すというのだ。話し合いの内容は、それぞれに反対賛成の意見をぶつけ合うというのではなさそう。多くはそのテーマに関する経験談といったエピソードを出し合い、その中から合意のヒントを得ていくようだ。

私の経験でも、地域の話し合いでいろいろなエピソードが披露されることがある。そうすると関連するエピソードが出され、そうだと話の輪が広がり、やがて別の話で盛り上がる。昔の対馬でもそんな感じで、あるテーマに集中して話すのではなく、エピソードの展開にまかせ他のテーマにも話が移り、また戻ってくるという調子のようなのだ。そうなれば夜も更けようし日も変わる。現代では、そんな話し合いをしていては何も決まらないというので効率的な合意形成を目指すことになる。

ただ、あらためて宮本の記録を読むと、現代においても大なり小なり時間の積み重ねでできた濃密なコミュニケーションがあり、ここではコミュニケーションの人間関係を傷つけない配慮が潜んでいることがあるのではないかと考えさせられる。他所からするとそれが効率の悪い、場合によっては変革を避ける旧態然とした「しきたり」にも見えるものでも、「一旦はリスペクトし」そのコミュニケーションならではの配慮がそこに潜んでいることはないかを見る余裕が欲しい。